

2017年度日本オセアニア学会関西地区研究例会の報告

関西地区研究例会幹事 渡辺文

2017年度の関西地区研究例会は、以下のとおり同志社大学にて開催された。

【日時】2018年1月20日（土）

【会場】同志社大学・烏丸キャンパス・志高館地下5

【プログラム】

13:30～14:30 発表者1：小杉世（大阪大学）

「マーシャル諸島をめぐる小説と詩にみるコロニアリズムと環境の問題」

14:30～14:45 コメンテーター：小野文生（同志社大学）

14:45～15:30 全体での討論

15:45～16:45 発表者2：佐野文哉（京都大学）

「フィジー手話会話における実環境の関与——「指さし」に着目して」

16:45～17:00 コメンテーター：丹羽典生（国立民族学博物館）

17:00～17:45 全体での討論

本年度の関西地区例会は、個人発表2名、それにたいするコメンテーター2名で開催した。小杉世会員の個人発表では、現代を「人新世」として捉える視座や、Spivakによる「想像力の訓練」の議論などを参照しながら、マーシャル諸島をめぐる小説や詩のもつ意味を理解するにあたっての枠組みが提示されたうえで、まずマーシャル諸島の軍事的背景が詳しく説明された。そして、とりわけ Kathy Jetnil-Kijiner の詩と、Robert Barclay の小説を取りあげながら、これらをもつ「想像力の訓練」としての可能性などが論じられた。小杉会員の発表にたいして小野文生氏からのコメントがなされたうえで、全体での討論がおこなわれた。つぎに佐野文哉会員の個人発表では、まずフィジーにおける手話やろう者にまつわる歴史的経緯や国内の地域差が説明されたうえで、動画資料を用いながら、手話会話の分析がなされた。そのさい、直示的な指さしが多用されること、実環境に動機づけられたそのような指さしを共有しそれを構文上の基盤としながら相互行為が交わされること、そして指さしはかれらの正確な空間認知能力に拠っていることなどが考察された。佐野会員の発表にたいして丹羽典生会員からのコメントがなされたうえで、全体での討論がおこなわれた。参加者合計は8名と、人数としてやや小規模ではあったものの、本例会は盛会のうちに終わった。